



接骨院に 心理学を入れてみた

〔9〕

寺田接骨院 寺田弘志

再発の予告

J R 茨木駅近くの接骨院が、私の職場です。

体のどこかをいためた人たちが、ここを訪ねて来られます。

初めて来院されて、施術が順調に終わった患者さんとの会話です。

「なんだか、だいぶ楽になった感じです」

「それは良かったです。でも、まだ、治ったとは限りませんから、無理しないでくださいね」

「はい。用心します」

「一度体がねじれると、体にクセがついていて、また元のほうにねじれてしまうこともあります」

「ぶりかえすということですか？」

「はい、そうなんです。反対に、縮みすぎていたところが伸びたことで、隠れていた緊張が出てきて、違うほうへねじれてしまうこともあります」

「ふーん、そういうこともあるんですかー。で、私はどうなるんでしょう？」

「それは、正直、わからないんです。一回の施術で落ち着く人もいれば、ぶり返す人もいますし、違う症状が出る人もいます。何回か通っていただくと、傾向がみえてきます」

「ぶり返したり、別の症状が出たりしたら、また来たらいいんですね」

「はい。そういうときは、早めに来てください。施術の効果が残っているうちに来ていただければ、3歩進んで2歩下がるという感じで、徐々にゴールに近づいて行けます。反対に、あんまり間を空けすぎて、3歩進んで3歩下がってしまうと、いつまでもゴールにたどりつけなくなってしまいます」

「わかりました」

せっかく良くなったとおっしゃってくださっている患者さんに、再発するとか、他の症状が出てくるとか、良くない話ばかりしていますが、これには理由があります。

やはり、日常生活に戻ると、症状がぶり返してしまうことや、今までと違う症状が出てくるものが少なくないのです。

「良くなりましたよ」とか「治しましたよ」とか施術者が言っていたのに、ぶり返したり、別の症状が出てきたりしたら、患者さんの気持ちに「良くなってないじゃないか」という反発が生じてしまいます。

反発から信頼関係が崩れたら、施術がうまくいかなくなったり、通院をやめてしまわれたりする可能性も出てきます。

整形外科に勤務していたときに、同僚に誘われて、〇〇式整体を体験しに行きました。

「どこか悪いところがありますか？」と聞かれたので「最近、長時間仕事をしているとお尻が痛いことがあります」と伝えました。

座った状態で、お尻をポンポン2回くらいたたかれて、「はい、終了」となりました。

「これで終わりですか？」とたずねたら、「そこで足踏みしてみなさい」と言われました。

足踏みしていると、「痛いですか？」と聞かれるので、「いいえ。今日は仕事をしていないから痛くありません」と答えました。

その先生に「痛くないのは、仕事をしていないからじゃなく、治したからだよ」と高圧的に言われました。

その後も長時間仕事をするとお尻が痛かったので、〇〇式整体に再び行くことはありませんでした。〇〇式整体の先生を信じられなくなったからです。

(今は、治し方がわかっているので、お尻の痛みは大丈夫です)。

たとえ患者さんが「良くなりました」と言われても、「治った」とか「治した」とかは言わないほうがいいと私は思います。

施術が終わって「これでよし」とか「これでいいですよ」とクロージングするのも、リスクがあります。

「また悪くなることがあるので、通ってくださいね」と説明するくらいでいいと私は思います。このように考えるのは、以前携わっていた心理療法に影響を受けているかもしれません。

心理療法に「再発の予告」という技法があります。

起こりうる症状を予告しておく、かえってそういう症状が出にくくなるという技法です。

もし、症状が出たとしても、セラピストの予告通りですから、セラピストの信用も損なわれず、クライアント（本人や家族）の動揺や落胆も少なくてすみます。

もし、再発しなくても、クライアントには何の不利益もありません。むしろ利益です。再発しなければ、セラピストの信用も高まります。

身体療法でも、再発の予告は有効です。

「施術を受けて、今は楽になっていただいているようですが、日常生活に戻ると、また、痛みがぶりかえしてくるかもしれません」

「今は、体のねじれを戻しただけですから、完全に治ったわけではありませんよ」

「いったん体が曲がってしまうとクセがついてしまうことがあって、また、体が曲がってくるかもしれません」

「ここのゆがみがとれたら、違うゆがみが出てくるかもしれません」

「痛いところが治ると、別のところが痛くなることもありますよ」

このように伝えておくほうが、患者さんは気をつけて日常生活を送ってくれますから、再発や悪化の防止になります。

「治りました」、「治しました」というと、患者さんは無理をしても大丈夫と勘違いしてしまいます。

こちらが「治りましたよ」と言っていないくても、施術がうまくいって状態が良くなったときは、患者さんは「治った」と思って油断します。そういうときに無理をして再発することが多いので、

「まだ治ってないですよ」と言ってあげるほうが親切です。

患者さんのためには、ちょっと痛みを残しておくぐらいがちょうどいいのかもしれません。実際にはなかなかそういう加減はしにくいですが・・・

1回の施術で体の状態が安定する人もいますが、何回か通ってもらって安定する人がほとんどです。

中には、安定するまでに何週間もかかる人もいますし、もっと長くかかる人もいます。

いつも同じ状態に戻ってしまう人、毎回、前の回とはまったく別の症状が出る人、毎回、前の回

とは似ているけれど少しずつ症状が変化する人・・・・・・という経過をたどるかは人それぞれです。

体のどこにも問題が見つからなくなって、1カ月くらい再発も、違う症状が出てくることもなければ、「治っているようですね」と言えるのではないのでしょうか。

悪いイメージは与えないほうが良いという考えもあります。

イメージすると、それが現実になってしまうことがあるからです。

しかし、リスクを説明しないことのリスクは小さくありません。

ですから、言葉でリスクを説明しながらも、施術によって良いイメージ（改善しそうだという体感）を患者さんに持ってもらえるようにするのが望ましいのではないのでしょうか。

冒頭の患者さんとの会話の続きです。

「先生、あんまり「治ります」とか「治します」とか言われたいんですね」

「テレビドラマでは、バンバン言ってますけど、治ることを保証してはいけないことになっています」

「でも、先生の手から「何とか治してあげよう」という気持ちが伝わってきました。また痛くなったら、ここに来たらいいんだとわかったら、安心しました」

